

# ヒノキカワモグリガの生態に関する研究(Ⅳ)

## — 宮崎県南部地方の被害について —

林業試験場九州支場 倉永善太郎  
 熊本営林局 田中 義行  
 宮崎県林業試験場 小川 哲

### 1. はじめに

この害虫の地理的分布と主要林業地の激害林における被害については、1982年9月末現在の調査結果を既に報告<sup>2)</sup>した。今回は宮崎県南部のオビスギ林業地帯について更に詳細な調査をおこない、若干の知見が得られたので報告する。なお、この調査にあたり格別のご配慮をいただいた熊本営林局前造林課長安藤宇一技官、同局技術開発室企画官有馬純敏技官、並びに、現地調査にご協力いただいた前飢肥営林署長野村憲吾技官、同署経営課長工敷技官、串間営林署経営課長松田定男技官をはじめ、上記営林署の関係者各位に厚くお礼申し上げる。

### 2. 調査地と調査方法

#### 1) 分布調査

既報の調査で分布が確認された宮崎県南部の北郷町を中心に、その後も引続き飢肥・串間の各営林署管内において、車道沿いのスギ造林地を対象とした食痕による分布調査をおこなった。

#### 2) 幼齢林の被害調査

激害が発生している北郷町黒山の民有林で、オビスギ18年生の被害木3本(平均樹高約8.2m、平均胸高直径9cm)を1982年11月8日に伐倒し、主幹部の食痕全数について被害歴と被害量および樹内の食痕分布状況を調査した。

#### 3) 老齢木枝条の食痕調査

飢肥営林署管内の三ツ岩国有林で1982年8月に伐採されたオビスギ(トサグロ、樹齢105年、樹高31~33m、胸高直径80~98cm)の枝条について、基部からの長さ56~100cmに切断された12本(基部の年輪42~70年、中央径4~8cm)にみられる食痕数と被害年を調査した。

### 3. 結果と考察

1) 前報および今回の調査で確認された食痕による地理的分布は図-1に示すとおりで、飢肥・串間の各営林署管内の全市・町と隣接の三股町・田野町・宮崎市でも分布が認められた。

この地域では南那珂郡北郷町の中央部、日南市の北

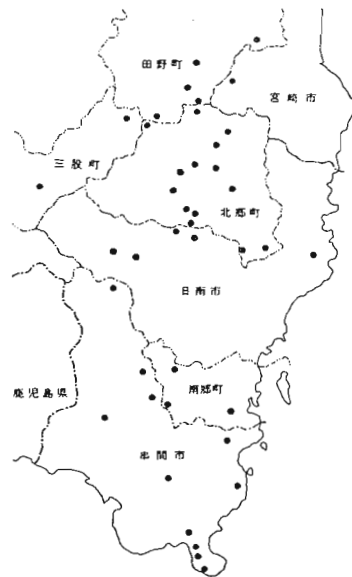


図-1 宮崎県南部地方の地理的分布

部・東部、串間市の南部などで激害が発生しており、これらはいずれもオビスギ系の林分である。

2) 激害林の幼齢木3本について、既報<sup>1,2)</sup>の調査方法で主幹部の食痕全数を調査し図-2および図-3の結果が得られた。この調査木では1973年より継続的に被害(食痕)が発生し、年間食痕数は7年目にピークとなり、現在やや下降の傾向を示している。

各調査木のピーク年における最多食痕数は42~65個で、地上高別の食痕数は0~1m部位が最も多く56~83個(平均71個)で、この食痕数はこれまでの調査で最高値となっている。

つぎに、主幹部の材内における食痕の分布状況につ

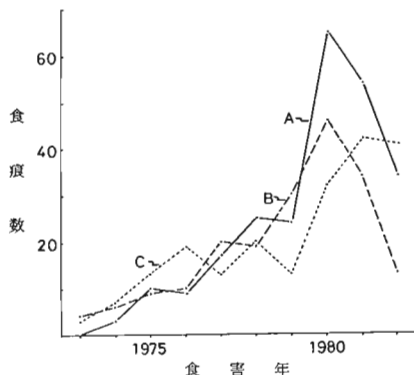


図-2 幼齢木の主幹部における食痕数の年次変動

いて、麻生ら<sup>3)</sup>は食痕の加害年と加害高の関係を報告しているが、この調査結果では、図-3のとおり比較的新しい食痕が地上近くでもかなり多量に認められた。これは、サンプリングや樹齢・被害歴・被害量などの林分環境の違いで若干異なることが考えられ、麻生らも指摘しているように更に詳細な検討が必要である。

3) 大径木の枝条12本について、全食痕の食害年を調査し、被害年別食痕数の年次変動を図-4に示した。これまでに古い被害の記録

として、鹿児島県内の丸太材から1963年の食痕を確認しているが、今回の調査でその記録を更新する1935年の食痕が発見され、本害虫はかなり古くから生息していることが判明した。

つぎに、この枝条部における年間食痕数は1945年頃より次第に増加し、1962~64年頃に最初のピークがみられ、その後一時減少しているが、1970年頃より再び増加して1979~80年には最大のピークになっている。この2回目の増加は既報の調査林の多くでみられた被害発生期にほぼ該当し、その増加曲線は前述の幼齢木の変動とも一致している。

また、この調査林の大径木では、地上に近い主幹部に本害虫が近年潜入したと思われるヤニの漏出や虫糞の排出は認められなかったが、その枝条部にみられる多数の食痕から推測すると、このような大径木では、幼虫の潜入(内樹皮食害)が容易な主幹上部又は枝条部で、長年にわたって本害虫の世代がくり返されているものと思われる。

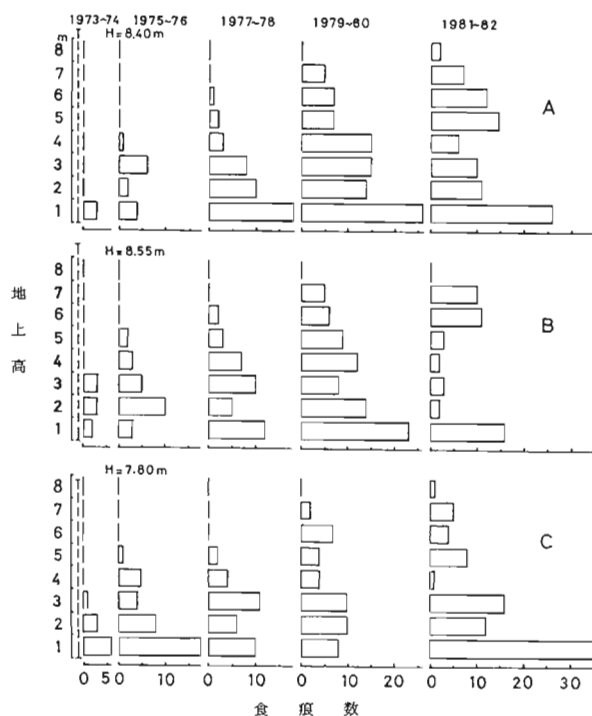


図-3 幼齢木主幹部の地上高に対する食害年別食痕数

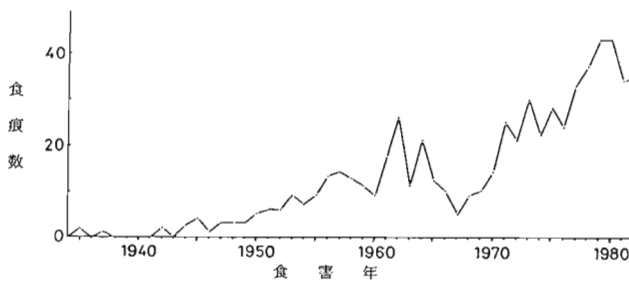


図-4 老齢木の枝条部における食痕数の年次変動

引用文献

- (1) 倉永善太郎・田中義行・麻生賢一：日林九支研論，35, 165~166, 1982
- (2) 倉永善太郎・田中義行・大長光純・麻生賢一・滝下国利：日林九支研論，36, 213~214, 1983
- (3) 麻生賢一・安藤茂信・高橋和博：日林九支研論，36, 211~212, 1983